福祉健康科学研究（16）149-158，2021

原著論文

コロナ禍のスポーツに関する インターネットコメントの分析

―高校野球を事例として―

河野　洋

福山平成大学　福祉健康学部
（健康スポーツ科学科）

E-mail：kohno@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本研究はコロナ禍におけるスポーツの価値を検討するものとして、2020年の高校野球をめぐってインターネット上でどのようなコメントが投稿されたかを、実際のデータを用いて示すことを目的とした。2020年4月から8月までの間に「Yahoo!ニュース」で配信された高校野球に関するニュースとコメントを収集し、コメント内容の精査を行った。その際、コメントデータの形態素解析によって得られた出現回数の多い語を特徴語とするコードの作成を行い、コメントのコーディングを行った。

調査の結果として、コロナ禍の高校野球に関する91,341件のコメントが収集された。また、これらのコメントから「新型コロナウィルスへの認識」「開催の否定」「球児への同情」など11のコードが作成された。最も出現率の高かったコードは「高校野球」で、47.86パーセントだった。また、「大人」「野球の特別扱い」「勉強の要求」のコードが作成された。

コロナ禍において、インターネット上では新型コロナウィルスの影響から高校野球の大会中止を支持するコメントが多く寄せられた。また、「大人に管理される高校球児」「高校野球の特別扱い」「高校生の本分は何か」といった趣旨のコメントが一定数認められ、高校野球の在り方を問い直すやりとりが交わされていることが明らかとなった。

キーワード：新型コロナウィルス、インターネットコメント、高校野球

1. 緒言

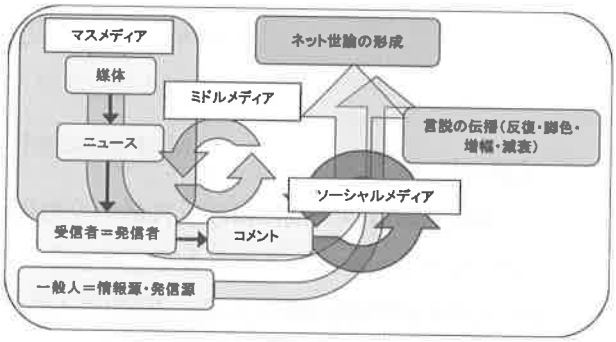
1.（1）研究背景

2020年，新型コロナウィルス（COVID-19）の影響によりスポーツもまた未曽有の事態に突入することとなった．歴史的なニュースとなったオリンピック・パラリンピック東京大会の延期については，開催を1年後に控える中で，国内からも再延期や中止を求める声が上がっている[1]．また，笹川スポーツ財団の調査では，コロナ禍で半数以上の人が以前行っていたスポーツ競技の実施が困難になったとしており[2]，プロスポーツから趣味の活動に至るまで，あらゆるスポーツが影響を受けることとなった．

このような中において，我々は「スポーツの価値とは何か」を改めて問うことになる．これまでにも日本のスポーツは，1995年の阪神淡路大震災や2011年の東日本大震災など，度々被害を受けることを経験してきた．そしてその都度，社会の復興と共にスポーツもまた元の姿を取り戻していった．ときにスポーツは「復興のシンボル」とされ，その活動によって人々や社会に活力を与えることもあった．しかし，舛本は東日本大震災における，スポーツの「存在意義」をめぐるジレンマを指摘している[3]．チャリティーマッチをひとつとっても，「時期尚早」と「今だからこそ」のジレンマや，遠方から来た選手がグラウンドで試合をする一方で被災地の子どもたちは屋外でのスポーツを制限されるなど，非常事態の中でスポーツの存在意義は確約されているわけではない．コロナ禍においても，「たかがスポーツ」「されどスポーツ」の対立軸の中で，今の我々にとってのスポーツの価値が再構築されることとなる．オリンピック・パラリンピックでさえも「たかが」「されど」のいずれかを付けなければならないのが，今日のスポーツが置かれている状況であるといえる．

ところで，社会の中での価値形成に，世論が影響を与えてきたことは周知の通りである．オリンピック・パラリンピック東京大会の開催にあたっても，都民・国民の支持が世論調査によって繰り返し報じられてきた．オリ・パラ自体が価値を備えているという考えだけでなく，都民や国民の支持があるからこそオリ・パラが価値を与えられるという視点も必要であろう．ただし，今日における世論は従来のマスメディアによる世論調査の結果だけでは説明できなくなっている．いわゆる「ネット世論」の存在によって，国民の声は複雑な様相を呈している[4)5)6)7)]．2010年頃のネット世論は，従来の世論と異なるものであることを強調され，我々にとって「取るに足らないもの」と考えられていた．しかし，「ポスト真実」「フェイク・ニュース」「オルタナティブ・ファクト」といった言葉の出現は，インターネット上の意見を，取るに足らないものと言えなくなった社会の状況を表している[8]．

木村はネット世論形成のプロセスを図1のように示している[4]．今日，我々はマスメディアから得た情報をインターネット上で再解釈するという文化を手に入れた．従来の世論はこの再解釈の行為に晒されることとなる．コロナ禍におけるスポーツの価値や，「たかがオリ・パラ」「されどオリ・パラ」の対立を考えるのにも，インターネットがその議論の場となることは避けられない現実である．



（木村，2018）

図1　日本社会におけるネット世論の構造

1.（2）研究の目的

本研究の関心は"With コロナ"時代におけるスポーツの価値を検討することにあるが，特に価値形成のプロセスとしてインターネットに投稿される人々のコメントに焦点を当てる．木村によれば，ネット世論の形成において，コメントはニュースの意味を再解釈する作業となる[4]．コメントを投稿し，他人のコメントを読む行為は，今日のスポーツの価値を形成する上で影響力を持つといえよう．インターネット上で，人々がコロナ禍のスポーツをめぐりどのようなやり取りを交わしているのかを明らかにすることは，本研究の関心に対して有益な知見を与えるものと考えられる．

この点において，本研究はコロナ禍のスポーツに対しインターネット上でどのようなコメントが投稿されているかを，実際のコメントデータを使って明らかにすることを目的とした．なお，本研究では，コロナ禍で話題となったスポーツテーマとして，高校野球を対象に設定した．2020年の高校野球は，春の選抜大会・夏の甲子園の中止をはじめ，その動向が多くの人々の関心となった．

河野は，高校野球の球数制限導入をめぐるインターネットコメントの調査を行っているが，テーマに関する多くのコメントの存在が認められた他，球数制限を通じて高校野球そのものの在り方を問う，本質的なコメントの存在が確認されている[9]．本研究においても「たかが高校野球」「されど高校野球」の対立軸で生じるインターネット上での議論の内容は，コロナ禍でのスポーツの価値を検討する上で重要な知見となると考えた．

1.（3）用語の定義

本研究では，2019年に中国で存在が確認された感染症「COVID-19」について，「新型コロナウィルス」という通称を用いる．正式名称よりも日本国内で認知されている通称を用いる方が，インターネットコメントをより適切に分析できると考えられたためである．

「甲子園」という語については，毎年8月に開催されていた全国高等学校野球選手権大会を指して用いる．

「代替大会」という語については，甲子園の中止を受けて検討・開催された都道府県別の代替大会を指して用いる．

「交流試合」という語については，春の選抜大会の中止を受けて開催された甲子園高校野球交流試合を指して用いる．

2. 方法

2.（1）データの収集・選定

2020年4月から8月まで，インターネットニュース配信サービス「Yahoo!ニュース」（以降，「Yニュース」とする）のスポーツカテゴリで配信されたすべての記事の見出しと，本文および配信日時を，テキストデータとして収集した．また，Yニュースには記事に対しユーザがコメントを書き込める機能がある．ニュースデータ収集の際は，記事に対するコメントもテキストデータとして収集した．

データ収集後，すべての記事の中から，調査の分析用データとして用いるコロナ禍の高校野球に関するニュースの選定を行った．作業として，本文に「高校野球」「甲子園」のいずれかの語を含む記事を検索し，該当した記事の見出しと内容を確認し，選定を行った．特に，高校総体全般やプロ野球など，記事の中心となる話題が高校野球と異なる場合には，本文中に先述の語が出現しても分析用データから除外した．

以上の作業によって，調査で用いる分析用データセットが作成された．

2.（2）分析用データの分類

データ収集期間の間，高校野球に関する記事内容やコメントの傾向は一様でないことが想定された．そのため，本研究の調査では，甲子園中止が決まるまでの期間を「第Ⅰ期」，甲子園中止が決まり，代替大会・交流試合の検討が行われた期間を「第Ⅱ期」，代替大会・交流試合が開催された期間を「第Ⅲ期」とした．その上で，ニュースの配信日時によって分析用データを第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期のいずれかに分類した．

2.（3）コメントデータの形態素解析

分析用データセットのコメントデータについて，形態素解析によりコメント中に出現する語の種類と出現回数の一覧を作成した．なお，形態素解析には，計量テキスト分析のためのソフトウェア「KH Coder」（https://khcoder.net/）を使用した．

2.（4）コメント内容の精査とコーディング

データセットのコメントについて，コーダー1名により内容の精査を行った．その際，形態素解析で出現回数の多かった語を中心に，コロナ禍における高校野球への考えを示すキーワードを選定した．その後，選定されたキーワードを特徴語とした，コロナ禍の高校野球に関するコードを作成し，コメントのコーディングを行った．

2.（5）データの集計

コーディングの後，データの集計を行った．コメントは作成されたコード毎に集計し，コードの出現コメント数および出現率を算出した．

また，ニュースの分類（第Ⅰ期／第Ⅱ期／第Ⅲ期）によってコード毎の出現コメント数および出現率をクロス集計した．

3. 結果

3.（1）分析用データセットの内訳

本研究の調査で行ったデータ収集・選定の結果，75件のニュースと91,341件のコメントからなる分析用データセットが作成された．

3.（2）ニュースの分類結果

75件のニュースのうち，第Ⅰ期には33件，第Ⅱ期に

表1　分析用データセットの内訳

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	計
ニュース	33 (44.0%)	17 (22.7%)	25 (33.3%)	75 (100.0%)
コメント	69,248 (75.8%)	12,782 (14.0%)	9,311 (10.2%)	91,341 (100.0%)

は17件，第Ⅲ期には25件が分類された．また，この分類に従ってニュースに連なるコメントも同様に分類した結果，全体の75.8パーセントにあたる69,248件が，第Ⅰ期のコメントとして収集された．

3.（3）コメントのコーディング

データセットのコメントのコーディングを行った結果，11のコードが作成された．

第1コードは「新型コロナウィルスへの認識」である．高校野球を語る上での社会背景として，新型コロナウィルスに関する認識を共有しようとするもので，「コロナ」「緊急事態宣言」「クラスター」などの語を含むコメントが該当した．

第2コードは「高校野球」である．高校野球や関係する大会に言及するもので，「高校野球」「甲子園」などの語を含むコメントが該当した．

第3コードは「他競技」である．野球を除く高校運動部活動や高校総体に言及するもので，「他競技」「インターハイ」「総体」などの語を含むコメントが該当した．

第4コードは「高校球児」である．高校野球の当事者である高校生に言及するもので，「球児」「生徒」「選手」などの語を含むコメントが該当した．

第5コードは「大人」である．高校野球の関係者に言及するもので，「大人」「高野連」「監督」などの語を含むコメントが該当した．

第6コードは「開催の否定」である．コロナ禍の中，高校野球の大会中止を支持するもので，「できない」「厳しい」「無理」などの語を含むコメントが該当した．

第7コードは「開催の諦め」である．高校野球の大会中止を不本意ながらも受け入れようとするもので，「仕方ない」「我慢」などの語を含むコメントが該当した．

第8コードは「球児への同情」である．大会が中止となった高校生に対する同情を示すもので，「可哀想」「残念」「辛い」などの語を含むコメントが該当した．

第9コードは「球児への励まし」である．大会が中止となった高校生を励ますもので，「夢」「応援」などの語を含むコメントが該当した．

第10コードは「勉強の要求」である．高校生に対し，スポーツを諦め勉強することを要求するもので，「勉強」「進路」の語を含むコメントが該当した．

第11コードは「野球の特別扱い」である．高校野球を特別扱いすることに言及するもので，「特別」の語を含むコメントが該当した．

3.（4）コード毎のコメント集計

作成されたコード毎にコメントを集計した結果，最も出現率が高かったのは「高校野球」のコードで，47.86パーセントだった．続けて「高校球児」（29.41%），「新型コロナウィルスへの認識」（24.49%）の順に出現率が高かった．

表2　コードの出現コメント数および出現率

コード	出現コメント数	出現率
高校野球	43,715	47.86%
高校球児	26,859	29.41%
新型コロナウィルスへの認識	22,367	24.49%
開催の否定	17,659	19.33%
大人	12,587	13.78%
他競技	12,119	13.27%
球児への励まし	10,715	11.73%
球児への同情	8,876	9.72%
野球の特別扱い	8,667	9.49%
開催の諦め	5,174	5.66%
勉強の要求	3,078	3.37%
（コード無し）	19,316	21.15%

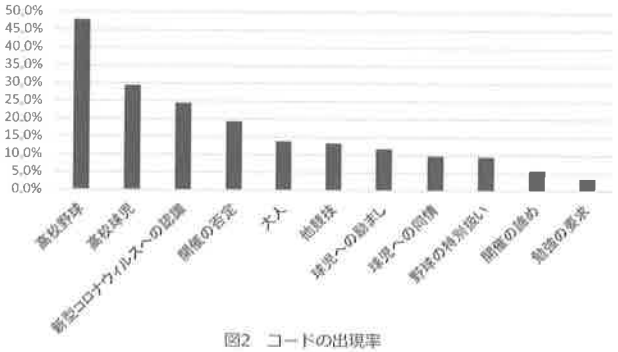


図2　コードの出現率

表3　コードの出現コメント数および出現率（期別）

	高校野球	高校球児	新型コロナウィルスへの認識
第Ⅰ期	35,473 (51.2%)	21,626 (31.2%)	18,496 (26.7%)
第Ⅱ期	5,414 (42.4%)	3,580 (28.0%)	2,430 (19.0%)
第Ⅲ期	2,828 (30.4%)	1,653 (17.8%)	1,441 (15.5%)
	開催の否定	**大人**	**他競技**
第Ⅰ期	15,024 (21.7%)	9,521 (13.7%)	10,665 (15.4%)
第Ⅱ期	1,783 (13.9%)	2,375 (18.6%)	1,195 (9.3%)
第Ⅲ期	852 (9.2%)	691 (7.4%)	259 (2.8%)
	球児への励まし	**球児への同情**	**野球の特別扱い**
第Ⅰ期	8,651 (12.5%)	7,895 (11.4%)	7,733 (11.2%)
第Ⅱ期	1,278 (10.0%)	640 (5.0%)	725 (5.7%)
第Ⅲ期	786 (8.4%)	341 (3.7%)	209 (2.2%)
	開催の諦め	**勉強の要求**	**合計**
第Ⅰ期	4,410 (6.4%)	2,678 (3.9%)	69,248 (100.0%)
第Ⅱ期	382 (3.0%)	306 (2.4%)	12,782 (100.0%)
第Ⅲ期	382 (4.1%)	94 (1.0%)	9,311 (100.0%)

3.（5）ニュースの分類によるコメントのクロス集計

データセットのニュースを第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期に分類し，コード毎の出現コメント数および出現率を再集計した．その結果,「大人」と「開催の諦め」を除くコードは，第Ⅰ期での出現率が最も高く，次いで第Ⅱ期，第Ⅲ期の順に高かった.「大人」のコードは，第Ⅱ期での出現率が最も高く，次いで第Ⅰ期，第Ⅲ期の順に高かった.「開催の諦め」のコードは，第Ⅰ期での出現率が最も高く，次いで第Ⅲ期，第Ⅱ期の順に高かった.

4. 考察

4.（1）コロナ禍の高校野球に関するコメントの全体像

本研究の調査では，コロナ禍の高校野球に関する約9万件のコメントが収集された．そのうちの約76パーセントは，2020年度のはじまりから甲子園が中止になるまでの，本研究が定義した第Ⅰ期に投稿されたコメントであった．この結果からも，調査期間中におけるインターネット上の最も大きな関心は，戦後初となる甲子園中止に関する動向であったことが認められよう．第Ⅰ期は新型コロナウィルスに関わる緊急事態宣言の発令やそれに伴う自粛期間など，我々の生活そのものが最も制限された時期であった．このような背景の中で，甲子園中止をめぐる議論は，単にスポーツイベントの開催是非を考えるものでなく，これから我々が以前の日常から何を残し，何を変えていくかを考える上での象徴的な議論だと捉えることもできる．

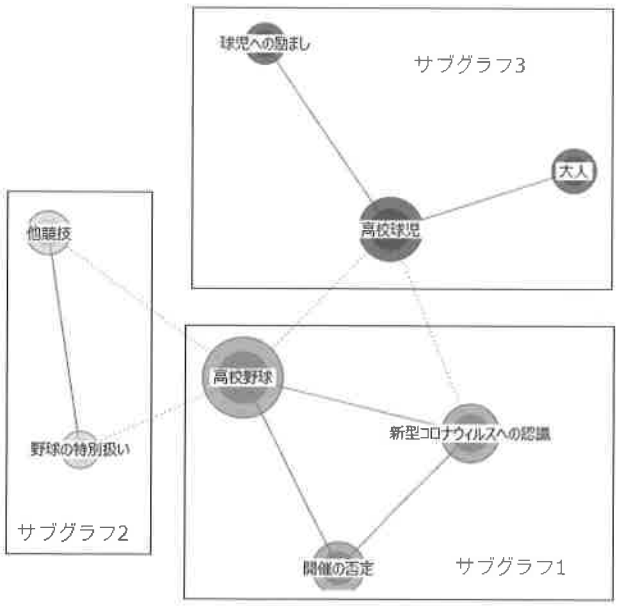


図3　コードの共起ネットワーク

図3は本研究の調査で作成された，コメントを分類するコードの共起関係を示した共起ネットワークである．いくつかのコードの間には，1件のコメント中に同時に複数のコードが出現する，共起関係が認められる．また，

共起ネットワークからは3つのサブグラフが抽出されている．サブグラフの存在は，そこにテーマ（コロナ禍の高校野球）に関する議論のまとまりがあることを示す．

サブグラフ1は，「高校野球」に「開催の否定」が繋がり，またそのどちらに対しても「新型コロナウィルスへの認識」が繋がっている．このサブグラフは，先述の甲子園中止をめぐる議論を示すものだと理解することができる．新型コロナウィルスの脅威や社会の動向を踏まえ，甲子園は中止するべきだという意見がサブグラフ1を構成するものとなる．舛本のいうジレンマを踏まえれば，甲子園は「今だからこそ」ではなく「時期尚早」であったと認識されたといえる[3]．

サブグラフ2は，「他競技」と「野球の特別扱い」が繋がるとともに，どちらとも「高校野球」との弱い繋がりが認められる．このサブグラフを構成するのは，コロナ禍において高校野球を特別扱いしてはならない，という意見である．インターハイの中止に伴って多くの高校運動部が活動停止を余儀なくされる中，甲子園が最後まで開催を模索したり，全国大会となる交流試合を検討したりしたことに，多くのインターネットユーザが「野球だけが特別扱いされている」と感じたようであった．高校野球は「たかが高校野球」であり，「されど高校野球」とは理解されなかった．

サブグラフ3は，「高校球児」に対し，「球児への励まし」と「大人」がそれぞれ繋がっている．このサブグラフは，活動や大会としての「高校野球」ではなく，当事者である高校生が話題の中心となっている．高校生に向けられるコメントのひとつは，甲子園が中止になったり，限られた環境の中で最後の大会に臨んだりする選手たちへの励ましの声であった．中には「将来」などの語を使い，高校生を励ましつつも最後の夏の出来事を受け入れて前に進むことを促すものもみられた．一方，高校生をめぐってサブグラフを構成するもうひとつの要因となったのが，高校野球をめぐる「子ども」と「大人」の関係であった．高校球児に対する最大限の配慮を大会関係者に求める声だけでなく，「大人の都合」で大会の開催可否が議論される様子を批判する意見などが認められた．

コメントを期別で見た際，ほとんどのコードは第Ⅰ期で最も出現率が高く，第Ⅱ期，第Ⅲ期と時間が経つにつれて出現率が低くなっていった．「大人」のコードは第Ⅱ期で最も出現率が高かった．第Ⅱ期は代替大会や交流試合の実施をめぐるニュースが報じられた時期であり，新型コロナウィルスの収束が見通せない中，大会日程や試合内容が一部の関係者によって決められていく様子に，高校野球が「大人の都合」で進められていると感じたユーザがいたものと考えられる．ただし，第Ⅱ期は何らかの形で大会が開催されることへの期待が生じた時期でもあり，「開催の諦め」のコードは最も低い出現率となった．

先述の通り，調査期間中の高校野球に対するインターネット上の関心は甲子園中止をめぐる話題に集中した．その一方で，代替大会・交流試合の結果や選手の活躍に対しては，あまり関心が持たれなかった．困難の中で今できるスポーツの可能性を熟考し，ようやく開催に至った代替大会・交流試合であったが，インターネット上ではその意義や価値を考えるやりとりがほとんどみられなかった．コロナ禍の高校野球は球児が鎬を削って頂点を目指すこと以上に，勝敗を超えて野球ができること自体に喜びを感じるものであったと考えられる．一時的なものだとしても，これはコロナ禍における高校野球の価値の変容といえる．しかし，インターネット上のコメントはそのようなスポーツの価値の変容を捉えたものというよりは，コロナ禍以前から存在する高校野球のステレオタイプに基づくものとして理解される．

4.（2）高校野球の本質を問うコメント

河野は高校野球の球数制限導入に対するインターネット上のコメントを分析する中で，高校野球そのものに関するいくつかの本質的なコメントの存在を指摘している[9]．ひとつは，高校野球は「特別」である，というものである．球数制限に反対する人の一部は，高校球児が体を壊してでも甲子園で最後まで投げ切りたいと思っている，と主張する．彼らにそこまでの意志を持たせるのは「甲子園が特別だから」ということであるが，この主張は実際，インターネット上で一定数の支持を得ている．また，もうひとつは高校球児が「大人」によって見せものにされている，というものである．スポンサーやメディアなど，高校野球を取り巻く大人たちの存在が指摘され，球数制限導入の是非よりも，このようなことを大人の都合で決めていくことに反対する意見が，インターネット上には一定数存在する．

甲子園を特別視する声や，高校野球における子どもと大人の関係に言及するコメントは，本研究の調査においてもその存在が認められた．そこには球数制限やコロナ禍での大会開催の是非といった限定的なテーマを超えた，高校野球についての本質的な問いを認めることがで

きよう．たとえば，「高校野球は特別である」という主張は，「だから，コロナ禍でも甲子園は開催してよい」と続けられることで，改めてその意味を問われることとなる．

本研究の調査で作成されたコードのひとつに，「勉強の要求」がある．このコードは，「野球などやっている時間があったら勉強をしろ」という趣旨のコメントに出現する．このコードも「大人」や「野球の特別扱い」と同様に，「高校生の本分は何か」という本質的な問いから派生するものと理解できる．

4.（3）コロナ禍におけるスポーツへのコメント

改めて本研究で調査対象となったコメントを俯瞰すると，甲子園中止を支持する声の中に，「野球はそこまで特別なものなのか」「高校生が今やるべきことはスポーツなのか」という本質的な問いを投げかけるものがあることが分かる．このような問いが，コロナ禍の中で一層強く訴えられることは予想されることである．東日本大震災の事例と同様に，あらゆるスポーツがその本質に立ち返って，自分たちが活動をすることの意味を再構築していくことを求められることになろう．

ただし，今回の調査において，新型コロナウィルスの影響で高校野球の価値が変容するほどのコメントは認められなかった．高校野球の特別扱いや大人の影響に対して以前から声が上げられていたことは先述の通りであり，新型コロナウィルスの影響によって生じた新たな主張というわけではない．高校生に勉強を求める声も，「スポーツしかできないスポーツ選手」のイメージは以前から存在するもので，勉強とスポーツとの関係を再構築するようなものではない．これらの点から考えるとすれば，新型コロナウィルスによって現実社会に大きな変化がもたらされた一方で，スポーツに関するインターネットのコメントの傾向に大きな変化は見られないといえる．この結果については，今後のインターネット研究においてひとつの有益な知見となり得るが，高校野球という限定されたテーマにおいて得られた知見をどこまで援用するかについては，今後の研究を待つ必要がある．

5. まとめ

本研究の目的は，コロナ禍での高校野球が，インターネット上でどのように語られたかを，実際のコメントデータを用いて示すことであった．2020年4月から8月までの間にYニュースに掲載された高校野球に関するニュースとコメントを収集し，コメント内容の精査を行った．結果として，調査期間中にインターネット上で最も大きな関心となったのは，甲子園の中止をめぐる話題であった．この話題に関し，インターネット上では新型コロナウィルスの影響から大会の中止を支持するコメントが多く寄せられた．また，高校野球の本質を問うコメントの存在が認められた．「大人に管理される高校球児」「高校野球の特別扱い」「高校生の本分は何か」といった趣旨のコメントが一定数認められ，インターネット上で，コロナ禍での高校野球の在り方を問い直すやりとりが交わされていることが明らかとなった．

今後の社会学研究において，新型コロナウィルスによる価値の変容はあらゆるテーマにおいて関心のひとつとなろう．本研究では，高校野球の価値を変容させるようなコメントの存在は数として認められなかった．しかし，インターネット上には，「新しい日常に甲子園は不要」「もはや部活動をする意味はない」といった声があることも事実である．そのため，今後も継続的な調査によってより多くの知見を蓄積し，インターネット上での議論の内容によって高校野球の価値が変容される可能性を注視する必要があろう．

本研究の調査以降も，新型コロナウィルスをめぐる社会状況は変化している．コロナ禍においてスポーツがどのような価値を与えられるかについては，継続的な関心を持って調査する必要があると考えられる．また，社会の動向とスポーツコメントとの紐づけとして，コメントを投稿しているユーザの属性が明らかにされることは有益である．特に，ユーザがスポーツとどのような関わりを持っているのかは，インターネット上にみられるスポーツの語りに影響を及ぼすものと考えられる．

高校野球のような特定のテーマの通時的調査とともに，本研究の調査はオリンピックやプロスポーツなど，コロナ禍におけるスポーツの価値の再構築に関する研究として対象を広げていくことも求められる．特に，オリンピックは最も重要なテーマのひとつであり，2021年の東京大会が新しい日常においてどのような価値を持つのかを考える上で，インターネット上のコミュニケーションは社会の中での価値形成のプロセスに関わる有用な知見を与えるものと考えられる．従来の世論と共に，インターネット上のコミュニケーションがコロナ禍のスポーツに与える影響を，今後も注視していくことが求められる．

参考文献

1）NHK. 2020東京オリンピック・パラリンピック電話世論調査（第2回）, https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20200722_1.pdf, 2020.（accessed 2020-09-23）
2）笹川スポーツ財団. 新型コロナウイルスによる運動・スポーツへの影響に関する全国調査（速報）, https://www.ssf.or.jp/files/report_covid19.pdf, 2020.（accessed 2020-09-23）
3）舛本直文. 東日本大震災時のジレンマ：スポーツの存在意義について考える, 体育・スポーツ哲学研究, 33（2）, 55-61, 2011.
4）木村忠正.「ネット世論」研究から見る「ハイブリッド・エスノグラフィー」の必要性, マス・コミュニケーション研究, 93, 43-60, 2018.
5）IISE. ネット世論の構造と社会的背景, https://www.i-ise.com/jp/column/hiroba/2016/20161028_02.html, 2016.（accessed 2020-09-23）
6）遠藤薫.「ネット世論」という曖昧：<世論>,<小公共圏>,<間メディア性>, マス・コミュニケーション研究, 77, 105-126, 2010.
7）総務省. インターネットによる世論の二極化についての定量的な研究結果, https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd114220.html, online.（accessed 2020-09-23）
8）NHK. ポスト真実 Post-truthの時代とマスメディアの揺らぎ, https://www.nhk.or.jp/bunken/research/domestic/pdf/20171101_9.pdf, 2017.（accessed 2020-09-23）
9）河野洋. スポーツニュースとインターネットのコメントとの関係―高校野球の球数制限を事例として―, 福山平成大学福祉健康科学研究, 15, 61-70, 2020.

Analyzing internet comments on sports during the coronavirus crisis: A case study of high school baseball

Yoh KOHNO

Department of Health and Sports Science,
Faculty of Health and Welfare Science,
Fukuyama Heisei University

E-mail：kohno@heisei-u.ac.jp

Abstract

As a consideration of the value of sports during the coronavirus crisis, this study aimed to show, using practical data, what kind of comments were posted on the internet regarding high school baseball in 2020. We collected and then carefully examined the contents of comments left on articles about high school baseball published on 'Yahoo! News' between April and August 2020. We coded the comments by creating a code that uses the words that appear most frequently, according to the morphological analysis of the comment data, as feature words.

As a result of the investigation, 91,341 comments on high school baseball during the coronavirus crisis were collected. From these comments, 11 codes were created. These codes included, "awareness of the novel coronavirus", "cancellation of the tournament", and "sympathy for the high school baseball players". The code that appeared most frequently was "high school baseball", which appeared in 47.86 percent of comments. Other codes created were, "adult", "special treatment of baseball", and "demands of schoolwork".

With regards to the coronavirus crisis, there were many comments posted on the internet supporting the cancellation of the high school baseball championship due to the novel coronavirus. A certain number of comments to the effect of "high school baseball players controlled by adults", "special treatment of high school baseball", and "What is the duty of high school students?" were found. This reveals that there was a discussion taking place questioning the current state of high school baseball.

KEYWORDS：Coronavirus, Internet comments, High school baseball